苦しみの場所

森口美都男

このとき人々、死を求むとも見出さず、
死なんと欲すとも死は逃げ去るべし。
（『ヨハネ黙示録』第九章六節）

一

現代の世界は、人類の集団自殺の危機に直面しており、それがさけられうるかどうか甚だ覚束なく、そこで「苦悶する現代」などということも言われている。しかし、現代のいわゆる「人類」は果して自殺しうるのだろうか。自殺しうるほどそれは高等な存在なのであろうか。「人類」は頓死しうるであろう。われわれが交通事故でいつ無造作に頓死させられるかわからぬ如く、「人類」も無造作に頓死しうるではあろう。しかし、その場合には悩んだ果ての、意を決しての、死を死ぬのではない。

今日の世界には、もはや苦悩などというものは一般には存在しないであろう。苦悩なるものはもともと人間のあるところにしかありえないが、今日の世界こそは、まさしく殆んど人間の喪われ去った世界にほかならないであろう。

今日、苦悩について考えたり語ったりすることは、それとしてはたしかに無意味に近いことである。しかし今日な

お例外的に人間なるものが存在するとするならば、そこにはまた実に恐るべき苦悩が集中的に存在している筈ではないだろうか。かつての世界では、苦しまず悩まぬ人間というものが例外的であった。人々がみなそれぞれの力に応じて、人間なるものが当然負うべき苦悩を担うたからである。しかし、今日の世界は、大衆（マス）というもの、アトム(注)の如き人間の凝集と拡散との、いな融合と分裂との空間にすぎない。集塊（マス）というのは、人間が共同的生命 communal life と人格とを放棄した所に出現する一種の偽・物理現象である。しかもこの世界がなお終っておらぬ以上、大衆がかつての庶民であったならば、彼らが負うたにちがいなかったであろう苦悩が、アトムの重囲のうちで自らもアトムに化されんとして息もたえだえな、しかしなおアトムならぬ極く僅かの人間によって負われるほかはない。人格の共同的な生が消失点に近づいている時、なおも人間たらんとするものは、当然人間の負いうる苦悩の極値を負わねばならぬであろう。それは恐らく、迫り来る癌細胞を逃れんとして逃れえぬ身体部分の激痛に最も似ていはしないか。とすれば「人類」の死因は、人間がその治療の方法を未だ知らぬ病気に類したものとなる筈であろう。

（注）「アトム」が文字通りにアトムなら、それには部分がない筈だから傷をうけるということはありえまい。「アトム」が文字通りにアトムならば、エネルギーの出入もない筈であり、アトムが疲れるということもありえまい。そして互いに結びついて一つの全体をなすなどいうことはなく、ただ離合集散を繰り返し、遠く近く飛び交うだけなのだから、あるアトムがその属する一つの全体に対して自らの勤めを怠りその責めを負うなどといったこともない筈であろう。そういう上位の全体がない以上、叱る者もなく、叱られる者もない筈である。また全体の崩壊する危険を慮って憂うるアトムなどいうものも考えられない。

尤も、二十世紀の物理学で、「アトム」と呼ばれているものは、真に不可分なものではなく、部分構造をもった全体であるらしい。真に〝素〟といえるものは見つかっておらぬときく。「アトム」という言葉の濫用についてはここでは深くは問わぬとして、アトムが内に分肢を含むものとすれば、その一部に深傷を負ったアトムは痛がって泣く可能性もありはしないだろうか。物理学的対象も単に機械的ではないといわれ出したのはもう余程古い話になるが、最近では「電子のふるまい」などいう言葉使いが普通の言い方にもなって少くともトリケモノ並みに扱われている。そして単に衝突したり飛び違ったりするだけのものに近づいてきたのはほかならぬ人間様である。

人間が過度に主体となれば、生ける自然は一旦は過度に粒子的となるほかはあるまい。有機的自然は消失点に迄圧迫されるであろう。そこに原子観というもの——斉合、不斉合は別として——がでてくる。しかしその過度の人間の主体性の標榜、むしろ人間による主体性の独占（従ってまた自然の過度の客体化）には、直ぐにこれに見合う不足、人間に於ける真の、つまり共に生き共に悩む主体性の不足と、自然に於ける客体性の不足とがつづいてくるかのようである。自然のうちの最も貧弱なもの、いわゆる「無機のもの」までが、人間の如くに痛み苦しみ、ベーコンの言葉通り「拷問にかけられ」て悲鳴をあげている。そして逆に人間が立派に非情のものと化し、共にありしものの死を悼むことも悲しむことも、共に歎くことも憂えることも、いわんや自らの内に悔いることも出来なくなっているのである。人間は恰かもいわゆる「素粒子」の如く、突如として現われては消えるだけの、つまり統計的にしか扱えぬもの、自己同一的な個体とはいえぬものとなってきている。一九六一年一月から六月までの間に、人命尊重を誇っている日本では何万何千何件かの轢き逃げがあり、それは全交通事故の約何%にあたり、それは昨年同期に比して何%の増加であるとかないとかいう風にしか人間は扱われないのである。かって神々が大いなるコズモスにすんでいた時、カオスは生ける自然の下方に蹲踞していた。数なるものはイデアに最も近く位置し、髪の毛や泥にはそのイデアの存在が疑われた。が今日では無機的なるもののうちにのみコズモスが求められ、ここ五〇年ほど数学者は専らカオス、といってわるければ少くとも無限定なものの世話にかかりきっているかの様にもきいている。カオスはまた人間の魂をこえて精神にまで昇り来った。精神分裂病が、狂気が、無機物質により、丸薬によって癒やされると真面目に信じている人がある。またかって石器や鉄器を用いて人間が互いに殺し合ったように、今は人間を使って、いわゆる「素粒子」同志が亡ぼし合いをしているかのようである。聴ては単なる物質の世界にまことの永久平和が現出するのであろうか。しかし、いうまでもないことながら、その時は即ち人間の消え去る時である。そこにはもはや世界中を飛びまわるアトムすらもなく、自己の他者を全く喪った単なる虚無、そこからは如何なる仕方でも、如何なるものも産まれえぬ虚無のみがひとりあるであろう。〔「現代世界のアトム化」ということについては、Max Picard, Ist Freiheit heute überhaupt möglich? (1955), Die Atomisierung der Person (1958)〔いずれも佐野利勝訳『騒音とアトム化の世界』に収められている〕についてその真景を知られたい。また坂田徳男「人間崩壊さなかの哲学」〔大阪市立大学文学会『人文研究』第十二巻四号一九六一年五月〕によってその日本における進行状態を知られたい。）

勿論、この比喩は十分に正確ではない。（しかしこの比喩以外に記述の方法もない。）アトム化の世にあって苦悶す

る人間は、その身体部分を癌に冒された個体にあたるのではなくて、癌細胞に囲まれつつなおも生きえんとする細胞自身、あるいは組織や器官にあたるからである。有機体の細胞や組織は自己の自由によってその属する身体を見棄てることはできない。（細胞がそれとして痛みを感じる事を免除されているのはこの故でもあろうか。）が人間は自分の家を出ることができ、友を去ることができ、国を棄てることをさえもなしうる。人間は本来、共同的な生命に与ることによってのみ自己の生命を生きうるのであるが、しかもかかる自己の属する全体を否み、それと縁を切る自由をも人間はもつ。人間は国に道が行われぬ時、その禄を食むことを恥じ、自己の決意によって餓死を選びうる。（内村鑑三は明治の日本に対してその決意を三度した。）そして国に道が行われる時にさえ、その同じ自由によって彼はまた、自分がその中に生を享けたこの共同的生命に対して叛逆を企てうるのである。（癌細胞は屢々身体に対する細胞の叛乱に比せられる、――人間が自由を放棄するにつれ、有機体の単なる細胞が自由を主張し始めたかの如くに。）

アトム化の重囲のうちにある人間が、アトム化に屈して自らもアトムに化することを選ぶならば、いうまでもなく、彼はその苦悶を脱しうるであろう。憂えも歎きも悲しみも憤りも悔いも悩みも迷いも、単なるアトムにすぎぬ彼を苦しめることはもはやないであろう。彼には疲れることすらなくなるかも知れぬ。彼の労働は、いなその心労ですら、すべて機械がやってのけ計算を済ましてくれる筈であろう。（機械が機械を発明する日は間近い、などといわゆる「科学技術者」はまじめに考えたり言ったりしている。）遊戯にも作戦にも、人間自身が頭を用いる余地はなくなるであろう。世界戦争は機械同志が闘い武勲をあげるのであり、人間は機械によって撒き散らされるチリ、ホコリにすぎまい。そして実にかくアトム化に屈した人間の身体こそが、ああ恐らくはまた癌に侵される危険の最も少い身体なのではないか。彼は身体的にすらもはや痛みをもつ筈のない性質（たち）のものとなっていて少しも不思議はない。彼は恐らく、アトムに化すること大きければ大きいほど、それだけより少い苦しみをもつことになるであろう。アトムには罰なるものを受ける資格はないからである。罰を受けうるのは、自由なる人格が、またその限りに於いてのみ受けうる

のである。――しかし同時に、彼のこのアトム化によって人間の世界は、それだけ大きく死滅に近づく。そして人間の世界が死に絶える時、そのアトムに化した人間もまた消失せねばならぬことは、身体の死とともに癌細胞自身もまた死に至るのと少しも変りはない。

それでは彼は、アトム化されアトム化する世界と絶縁してはどうであろうか。（けだし人間たる彼にはその自由もあるのだから。）アトム化の世界を、即ち、父なるもの、母なるもの、子なるもの、教えるもの、教えられるもの、そして友なるものの殆んど喪われ終った世界を見放して、自己に閉鎖してはどうであろうか。その時にも恐らく彼はその苦悩を去りうるかも知れない。彼はもはや彼がその為に悲しみ歎くべき他者をもたず、彼がその上を憂うべき全体とも関わりはないのだから。彼は国につこうかつくまいか、を思い悩む必要はもはやないであろう。この師に従うことがかの師に背くことになりはせぬかに心を痛めることもなく、かれを友とすることがこれを裏切ることになる心配もあるまい。何故なら、アトムの集塊が信義に無関係であり、そこには背信の恐れと悲しみと咎めとが全く欠落していることはいうまでもないとして、しかもあるものとてはただアトム化の世界あるのみという時には、これと絶縁しても、一体何処にさらに国があり家があり師があり友があるだろうか。そして彼が他者をもたぬ以上、もはや何らの負い目も生じることはなく、従ってまた義なるものを義でないとし、義ならぬものを義としつつある自己に、晴れやかならぬ良心の責めを悩まねばならぬ日ももはや来ぬでもあろう。――しかしこれは彼の孤絶を意味する。従ってまた自己でもありえぬことを意味する。けだし人間とは人格であり、人格とは汝との共なる生によってのみはじめて自己でありうる如き自由なる存在をいうのであろう。かくしてアトム化の世界を棄て去ることによってもまた人間は自己を失う。

かくしてアトム化のただ中にあって、人間である者、ありつづけようとする者は、死にゆく人間世界の故に歎き、恐れ、苦しみ、アトムに化しゆく友を悼んで悶えるのみではなく、また自己の故にも苦悩からの脱出を求めて上の二

つの途、即ち自らもアトム化に屈することと、アトム化の世界と絶縁することとの間を迷わざるをえない。――けだし人間としては、彼と雖も自己の苦悶を悦びうる能力は与えられていないであろう。そして彼はこの迷いによってもまた苦しむ。彼の前には人間的自己の死か、それとも現在の極値に近い苦悩の忍受か、という選択がある。そして彼が人間として、自己一個の上をまず思うものたる限りは、この後の選択に対して決断をなしえぬこと自身もまた、新なる迷いと悩みとを加えるであろう。

私は自分がアトム化の世界におけるアトムならざる人間、――即ち「例外者」の一人だなどと思っているわけではない。そんなことは不可能である。今日もなお「自己自身との闘い」ということが有意味に語られうるとすれば、それはただほかならぬ自己自身のうちなるアトム化、アトム化された自己との闘いであるのだ。私は、自分が既にアトム化（右に述べた如き意味で）されつつあることを、認めざるをえぬ者である。――名のみ父であって父であることをなしえぬ者、名のみ子であって実は子というものでありえなかった者、名のみ学ぶ者であって学ぶことをなしえていぬ者が、その限りアトム化された人間と呼ばれてよいならば、自分も既に重くアトムに化した人間というほかはない。しかもまた、私は自分がすっかりアトムになり終ったとも思っていない。全自己のどれ程までが既にアトムに化し、泥の如きものとなっているか、それはこれ以上言わぬが、他方単なる衝動ではない苦しみが僅かながら、私には確かにまだ残っているからである。われわれには、自分の身体がどこも悪くないのにアソコが悪いココが悪いと訴えることがある。また苦しい筈だのに少しも苦しく感じないということもある。しかし実際には少しも苦しくないのに、ただ主観的に苦しいと感じているなどということはあるまい。自分が苦しいと感じればそれは苦しくあるのである。私は自分の苦しみを錯覚だとかつくりごとだとかいうわけにはゆかない。

私の中には、恐らくまだ例外的な部分が、痛みを感じうる部分が僅かながら残されているのである。そして例外的

な魂をもつのではなくて、魂になお例外的な部分を残されている人々に、その部分に私は訴えているのである。私は今の日本の少なからぬ方々がそういう人々であると信じてはならないか？

曾っての、家があり友があり国があった世界では、自分の苦しみを人前に曝すような人はなく、それをまた自慢でもあるかの様に(注)人に吹聴などすれば、それはたしかにお笑い草でしかなかったであろう。

（注）人の繰り言というものは聞づらい。弱音、泣言というものは常に聞く者を不快にする。他人が苦しい、辛いと訴えるのをきけば、少くも私自身はまず意地悪を言いたくなるし、神妙に同情をのべる時でも大抵は鼻で嗤い度いのをこらえているのである。苦しんでいるということがそれ自身としては本来自慢の種になることがらでなく、却ってむしろ恥ずべきことがらであることは、「君はシンから幸福ではないのだね」とか「大分難儀のようだね」とかいう言葉が殆んどの場合に侮辱を意味するものであることからしても明かである。人は本当に貧乏をすれば、どうでもしてその貧苦をかくすものだという。苦心談というものがあるが、そこでも苦しみ自身が誇られるのではなく、余人の及ばぬ働きあるいは功業が誇られるのである。この事は同時にまた苦しみがではなくて悦びが、真に義しい人間の本来的な状態であること、そしてその悦びに対してもその苦しみに対しても人間は責任をもっていることを示しているであろう。同情や憐憫が侮辱や蔑視を意味せぬのは、同情をうけた人が同情された状況に対して責任がないことが明かな場合に限られている。しかしいわゆる「深刻がる」という仕方で、苦しみが自慢の種になり始めたのは、普遍的アトム化の始期――十九世紀後半――と一致するので一寸断っておく。）

しかし現代では、かりに誰かがそういう愚行を敢えてしたとしても、それを気に留めて嗤う労を取ってくれる人さえも殆んどないのではないだろうか。――私は、自分のなけなしの、しかしアトム化の照射を絶えずうけつつある自分自身にとっては決してどうでもよくはない「自分の苦しみ」について、僅か許り考えたことを書いて印刷して貰おうとしているのであるが、それは本来の世界ではたしかに破廉恥な振舞いである。しかし私は、アトム化に屈した今日の日本に対して、「嗤いすらもようしまい」という侮蔑を禁じえない。侮蔑に値しないもの、また侮蔑をもって対してはならぬものに侮蔑を感じ、その強さが自分の恥じをも忘れさせるということ、このこと自身は私の苦しみの根因と無関係ではあるまい。ただ「苦とは（少くとも自分が苦だと思っているそのものは）一体何であるのか？　この

苦というものは一体何故あるのか?」ということを考えてゆくうち、今の世界で真実の人間である人には、私などに思いもよらぬほど実に如何ばかりの苦悩があるに相違ないか、それを幾らか理解しえた様に私は思った。そして曾つて「苦」と呼ばれ、古くから東洋でも西欧でも問題にされてきたものが、そのどれかが、私がこの言葉の下に解しているものと果して同じなのかどうか、またどれがそうなのか――私はそれを、誰方かから教わりえたならと思うのである。このことにはある希望がある。恐らく、真実の人間が真実の人間であるが故にもつであろう苦悩というものは、私が今自分で味っているものとは違うであろう。それがどういうものであるのか私には分からないが、私はそれを知らねばならぬ。それが本当にわかった時、私の苦は苦であることをやめる見込がある。しかし今私が述べうるのは、私が同じ名で呼んで私がそのうちに囚われているそのものだけである。そしてそれを述べずにはおられない。

その私の囚われている苦しみというのは、「現代の此の日本で、一体どう働くことが、凡そ働くことになりうるのか」という困惑から発するものである。大学卒業以来かなりの期間、私がそれこそ「働くこと」だと許り心得ておったもの、また世間が益々勢いをましつつ専ら「働く」という言葉の意味として解していると思われるものは、明かにアトム化し、アトム化されること以外の何ものでもなかった。しかし働けば働く程、世界の、また祖国の死に寄与し、自分も人格として死にゆく、というようなことが、一体「働くこと」の意味でありうるだろうか? いわゆる「業績」なるものは今日では全く無意味なのでなければ、つくればつくる程世の病態を悪化させるものとなっていると思う。熱核反応の研究は大「業績」である。しかしそれに力を尽すことを働きということには、私でなくても躊躇する人の方が多いであろう。働くことにはたしかに死にゆくこと、という一面があり、その故に労苦という言葉もあるのだとして、しかも、それはただ他を死なしめ自分も死ぬという様なことである筈がない。働くことは少くとも死にゆくことを媒介として創ること、自他に生を与えることでなくてはならない。しかしアトム化の完了寸前にある今の世界で、一体どうすることが納得のゆく仕方で自分の「働くこと」でありうるのであるか? (不公正な自分の人間というもの

はそのままにしておいて「世界平和の為の何々委員会」などというものの委員に勝手に任命したりされたり、示威行進をしたりすることか？　私はそうでないと断言する。）アトムの如くに世界中を飛び動くことが、人間の働くことなのではないとして、それでは活動せぬことが働くことでありうるのか？　ただ業績をあげないこと、能率の悪いことをのみ努むべきなのか？　しかし何も仕事をしないで徒食することにどうして私は安らいうるだろうか？　或いは、活動せずにいてしかも真に働くこと、――そういうことがありうるとすれば、それは私がどうすることをいうのか？　或いは私が、私の本来のあり方であるだろう「幸福に値する」（カント）のは、(注)それは私の働きというべきものだけに（あるいは全然）よるのではないのでもあろうか。しかしそれでもいわゆる働くことをせずに、世――それがよしアトム化の世界であろうとも――から食をえることにどうして咎めを覚えずにいられようか？　その心の咎めこそが根本的には間違いだとしても、それではその理由はどこにあるのか？　――実際の問題として、私は普通の意味で働くことを労苦として厭うに劣らず、いなその幾倍も、いわゆる働きをなしえぬこと、なしてはならぬこと――アトム化に屈してはならぬこと――にもまた苦しむ。それは本来苦しんではならぬ苦しみであるでもあろう。しかしもう一度、その間違いは根本的に何処にあるのか。こうしたことにつき、一旦アトム化の問題の以前へ帰り、働くこと、働かぬことに伴う苦というものを中心に、少しばかり考えを書きつけておこう。

（注）前々注に参照を願ったスイスの予言者マックス・ピカートは「今日、およそ自由は可能であろうか。キリスト者にとってはキリスト信仰へと決断することがつねに可能である、とひとは言い、或いはまた、カントに従って、人間は外部の原因に依存することのない自由な選択を通じて道徳律のもとに立つことが出来る、と言われている。理念としての人間ならそのようなことも出来るだろう、しかし血肉をそなえた現実の人間はそうはゆかない」（「現代にも自由は可能か」）と言っている。彼は、少くとも現代に生きるわれわれは、現実に人格でなどありはしない、われわれが人格であることを自明と考えることなどもっての外だと言っているのである。真実がピカートのいう通りであるとすれば、そして私はそう考えざるをえぬ者であるが、今日、カントを理解するということは、一体何事を意味しうるのであろう？　カントの教えに従って生きることができぬと知っ

て、しかもカントの研究に没頭するというのは一体どういうことなのか？　何の為なのか。右の引用文のカントへの言及の前の部分の含意を熟考して貰方は戦慄を覚えないのか。禅や浄土教信仰についても事情はもとより少しも変るまい。そして今日では一種の物理的な力にすぎなくなっているマルキシズムにあっても、これによって世界が救われうるなどとは、正気のマルキシストならば決して本気で信じてなどいはすまい。爾余のいわゆるブルジョワ・デモクラシーの諸系譜――これがアトム化の発生源、第一次病巣――については言葉を費すだけが愚かしい。この私自身が、『実践理性批判』の愛読者アイヒマンでないことは確かなのか？　ああ私よ、そのことは確かなのか？

二

働くというのは一体どういうことなのであろうか。人間が働くということは、本来どういう意味をもったことがらなのであろうか。

私は、一方では出来るだけ自分の労すること、辛苦することの少なからんことを希っており、厄介で、骨の折れる仕事をかわす口実をさがすに忙しい。しかし他方、私は余人を措いて我れこそが功を挙げたいとも考えており、一つ大いに働いて見たいとも希っている。一体働くことが如何なることであるが故に私はそれを逃げる工夫にかくも頭を悩ますのだろうか。しかもまた他方、それが如何なる意味のものだからこそ、私は働かずにいれば気が重く、また他人ではなくこの自分が働いたのでなくては気が済まないのか。

私はたしかに楽をしたがっている。楽をしたがっている者としては、私は難境にあたることには尻込みし、危地へ赴く事を嫌がり、その様な羽目になれば、自分の不運を怨むであろう。自分は余りにも難儀な持場を与えられた、貧乏クジを引いたとかこち、自分にかくも不当な仕打ちを喰らわせる運命をなじるであろう。

しかも私は、誰の手にでも合う、取りたてていう程の価値のない仕事をあてがわれること、余人をもって代えうる、ありふれた、容易な持場に配置されることにも、決して心穏かではありえない。いわんや要保護の者、庇われねばな

らぬ者として扱われることには恥じと憤りを覚える。私を私の手には合わぬ役柄から免除する為には、「貴方に出て貰うには及ばない。もっとむつかしくなったら頼みます」などというもってまわった慰めが必要なのである。私は下っ端仕事はおろか、月並みの、平均の仕事をあてがわれることをすら不満とする。自分の働きが人並みすぐれているのでなくてはおさまらない。

私は楽をしたがっている。少しでも労を省きたがっている。怠けたがっている。「この煩労から解放されたなら」と思わぬ日は多分ただの一日もないかも知れない。しかも、他の誰かが私の任務とされている仕事をすべて片付けてしまい、もはや私の仕事は何も残されていぬとした場合、私は果して単純に悦びうるであろうか。あるいは私が何かに難渋している場合、その有様を人に見られ、手伝われることを極度に恐れることがありはしないだろうか。われわれが自分では親切の積もりで、他人にホンの僅かの手助けをした場合、礼を言われる代りに意想外の不気嫌に、否、ひとの仕事をブチこわしにしやがったという憤激にさえ時として出合うことがありはしまいか。そして手を貸されて人が怒るのは、事実われわれの側に心なきわざがあったからではないだろうか。われわれが他人に援助を申し出ようとする場合には、相手の心を傷つけまいための細心の配慮が、そして恩に着せることにならぬようにとの遠慮が必要とされないだろうか。幼児でさえも、大人が気を利かした積もりで、しかしウッカリ粗い心で手を貸してやった場合、それがすっかり自分の力ではなく、他人の力をまってはじめて出来たことを感じとる時には、特に彼一箇の工夫では到底首尾よくやりおおせぬことを見抜かれ、同情をかけられてしまった、と感じとった時には、憎悪の形相凄まじく実に身を慄わせて腹を立てる場合があるのである。

人並みすぐれた働き場所を得たい、その仕事は自分がやりたいという心は、自分の功績を、勲功を、名誉を、栄光を望むことと、そしていわゆる名誉慾とも不可分のものであるであろう。そこには常に虚栄心が結びついているであろう。しかし、自分の代わりに他人に働いて貰うことを肯んじないということは、名誉慾や虚栄心の中へと簡単に解

消されると許りはいえない。もし、その様に解消されうるものとすれば、即ちわれわれが自ら働きたいという場合、単に己れの見栄を飾ることにだけ関心をもっているのであるとすれば、われわれが誤って自己に帰された、つまり自己が実はそれに価しない功績をうけとることに強く反撥する場合があるのは何故なのであろう。自分の失策を看逃がして貰った場合、自分が特恵をうけて甘かされていると知った場合、それを悦びえずに逆に却って激しく悶える場合があるのは何故なのであろう。デカルトやシュタイナーが、自分自身の頭で解いてしまってからでなくては、既に先人の解いている問題の解を絶対に見ようとしなかったのは何故なのであろう。この二人の大数学者は何故、省きうる労を省かなかったのであろうか。

われわれは決して単に他人から大きな拍手喝采を得ること、それに伴う快感をのみ欲しているのではない。われわれの虚栄心よりもさらに深く、われわれには、その称賛に値する働きが、真に、実際に、客観的に、正真正銘、自分のものであることを欲し、そのことを確認せずにおけぬ心があると思う。われわれには他人の手柄を横取りするという浅ましい根性もたしかにありはするが、その反面、口先きだけの阿ねりを憾みとし、それを固辞し、自分の間違いが間違いとしてあからさまに指摘されぬことにこそ自分の存在可能性への侵害を感じる心もある。即ちわれわれの心には自分の責任を責任として追究して貰えることをねがい、それが得られないということにこそむしろやる方ない憤懣を覚える層がある。われわれは、心の浅い層では虚栄を求めるであろうが、さらに心の底深くでは、虚ならぬ、実の栄光を求めているのである。(注) 己れに属する栄光が詐りのものでないこと、虚ならぬことをこそ確認せずにはいられないのである。虚ならぬ栄光への方向が人格的存在の根本にあればこそ、凡そ人間が虚栄を求めるということもあるのである。

(注) 自分を実際あるよりも偉く見せようとする時、他人から偉く見られたいと欲する時、われわれは自らの偉くないことをウスウス気づいておればこそ、そうでない様に見えたいのであろう。虚栄のうちにある人は、かく自分を内心偉大と認めえぬの

である以上、彼は決して自己に得意なのではなくて、逆にむしろ自分に失望しているのである。われわれが虚飾家に嫌悪を感じる事はあっても怒りを感じることがないのは、虚飾家の本質が傲慢にではなくてむしろ卑賤にあるが故であり、虚飾家もわれにかえることがあるものとすれば、彼はわれと自らに憐憫を覚える筈であろう。虚栄家というものは愛嬌のあるものである。少しも見栄を張らぬ人間には親しみがもてない。

しかしそれではわれわれが自己の働きを過大に評価し、実際の（客観的な）自分の値い以上の栄光を自己に帰する場合はどうであろうか。自己の功績の大なることを自ら確信しており、従って自分を偉く見せる小細工を全くしない人は傲慢なる人といわれるべきであろうか。自分が偉いと見られたことを悦ぶのでなく、自ら偉くある――そう彼自身に思えるにすぎぬが――ことに満足を感じており、どうかすると自分の欠点を平気で人前にさらす気味の人は、直ちに思いあがった人といいうるであろうか？　虚栄心とはちがい、たしかにこの自己満足は思いあがりに近い。自己を高きものと見、自己の価値の高さに満足することそれ自身は、プライドといいうるであろう。しかもこの満足が彼の自己への甘さにもとづいていると見られる限り、自分の実際の功績以上の功績を平然と自らに帰していることには、やはり一種の無邪気さ、ないしは卑しさが含まれている。そこには、虚飾の労が取られていないだけそれだけ、ヌケヌケと自分を自己の真価よりも高く買わせる横着な根性があり、その点で虚栄家にないある思いあがりはたしかにある。しかも他方虚飾し化粧する労を省いているが故に却って、その高く売りつける根性は、一層サモしく、一層ケチであるとも見られる。ところがサモしさというものは、もともとプライドとは逆方向のものであり、自分に甘い点をつけて肩をいからしている自惚れ屋は、虚栄家とは異った仕方で欺かれ易いものを欺いているにすぎない。ほかならぬ彼自身がこの他愛なく欺かれている当人であるというにすぎない。彼は他に待つ心をもたぬ限り、たしかに傲れるものではあるけれども、しかもこの他よりの栄光を求めぬ心性の裏には、卑小なる自己を許し、卑小であるクセに他を悦ばすことを努めぬという怠惰もくっついている。この労力の出し惜しみは愚鈍を伴ったケチである。これは評価標準の貧しさ、評価標準に関しての賤民根性を意味する。

プライドというのは、むしろ自分の取ってよいだけのものをしか絶対に取るまいとする細心、むしろ惜しげもなく他へ呉れてやる態度、そして自らがサモしいものたることには耐ええぬことにこそあるであろう。その意味では、われわれが自分の価値を少なめに評価する傾向の中にある時にこそ、却ってプライドのうちにあり、いい気になっているともいわれえねばならない。自分という人間の価値の見積りを、少なめに控えめにしようとする傾きのうちにある時、つまりわれわれが自分自身に対して点を辛くし、自らに要求すること大なるものである時、はじめてわれわれは誇り高さのうちにあり、傲りの危険に曝され

ているといいうる。それはネダリがましく、要求がましい態度の反対である。現在の自分の値いを堅く踏むということ、即ち現在の自分にふさわしい取り分を小さく見るということは、本来の自分、即ち真に自分と呼びうる自分を存在の高い状態へと位置づけているということ、従ってまた、自分自身にそれだけ大きい働きが要求されて当然であるような存在状態を帰しているということにほかならない。

人間は、自ら創造する者でもあることなくしては、本来の意味で生きることができない。それがわれわれにあって、他よりの援助を拒む心のかくも強い理由ではないだろうか。

自分の担うべき労苦を他人が代わって負うてくれることの可能性を、即ち自分の代わりに他人が労苦し、自分の労する余地がなくなることを、私は心ひそかに如何に恐れていることであろう。自分の任務は必ずしも自分でなくても負いうるということ、自分の任務が自分の任務でないということ位、私に容認し難いことはない。私は、自分を消費することをよりは、むしろ自らを全く消費することなく物質の如くにいつまでも存続しうることの方をこそ深く恐れているのである。自らの労する余地、自らを消費する余地が減少するに従って、われわれは人間としては、それだけ死んだものとなる。他人の労を省くということには、他人より生甲斐を奪う面があるのである。われわれが旺盛に生きているということは、自分こそがイの一番に働きたいということなのであり、ある意味では他人の為に苦しみたいということでさえある。さればこそ、働きすぎる人間は、彼が苦労すればする程却って人の忌む所となることも多いのである。われわれは、自分の為に働いてくれ恩恵を与えてくれる人に、決して単純に感謝ばかりしているものではない。恩恵をうける側の人間は、極めて多くの場合に、却って屈辱感や被害意識をもっており――事実、ある意味でたしかに自分の立つ瀬を奪われつつあるのであるから――時には、恩恵者の死を願うことさえもあるであろう。人は、彼の出る幕が全然なくなる時、その時また自ら創り出す機会を奪われるといいうるならば、しかももし創ることなくして本来の自己（恐らく自由なる自己）を得る（恐らくは返えされる）見込みもないとすれば、自分の労する余地を

なくする者をば自己の可能的殺害者と感じ、自分が殺されまいとして彼を殺そうとしても、一がいに忘恩とのみ評することは出来ないともいいうる。

他人がその功労を犒われているのを見る時、われわれは羨望を感じる。またその犒いが至当のものであればある程そうである。そして自分には犒われるだけの働きの無いことを悲しく思う。この感情を単に嫉妬といって片付けることは出来ない。ここで問題になっているのは他人の幸運というものではなくて、主体の自由創造の有無なのである。——われわれは決して自分に労苦の少なからんことをのみ欲しているのではない。人間というものは決してただ楽をしたがっているだけのものなのではない。働かなくていい境涯にある人をわれわれは羨む。しかしそれは単に彼の苦労の少なさを羨むのではなくて、それが彼の功労の結果たることを羨むのである。羨むとは、「その状態が自分に属しているのであったなら」と現在の事実の反対を願望することである。即ち現在の事実たる、自分にあっての労苦と功績との欠如が、憾みとされ歎きとされているのである。人間は、どれほど労苦をかこっていても、しかも他方決して働きのない自分、無為の自分に安らいうるものではない。われわれは、その自我のより深い層においては、自分が労苦しうることを、いな恐らく労多きことをこそむしろ欲しているのである。他人がでなく、この自らが難にあたりうべき者たることをどこまでも欲しているのである。私は仕事が他人に渡ること、自分が仕事から割愛されることを恐れており、その極限では、他人がではなく、まさに自らが生命をなげだしうること、死にうることをさえ欲しているのである。そして自己に死ぬことが他に有を与えること、創ることを意味しうる限りにおいて、自己が創造者なることを、また自己が自由なることを——けだし自己に死ぬことなくして自由はありえまいから——欲しているのである。

かくしてわれわれは、生来働きたがらぬ者である以上に、実は働きたがっている者でもある。右のいくつかの事例は、働くことを措いては人間は本来の自己になり得ぬということを、またわれわれは誰しもこのことを心のひそかな

場所で何ほどかは心得ているということを示していると思われる。働かずにいることには何か人間存在の本来にそむく所があるのであろう。われわれが働きたがるのは自己になりたいからであろう。われわれは誰しも自らの労苦の結果ではない栄誉などを、心の底から欲したり諾ったりしてはいないのである。また一生食うに困りさえせねばいい、好きなことをして暮そう、などということで落着いていられるものでもないのである。さりとて、ただ単に骨折って辛い思いのみして生きてきた、ということばかりで満足して死んでゆけるものであろうか。われわれは自分で創ったと言い得るものをどうでもしてもたねばならぬが故に働くのではないだろうか。労して働き、そしてその功を収めて虚ならぬ誉まれを得るということは、人間存在の本質についたことなのではないだろうか。

人間が働くということの意味はこれでは、まだ少しも明かになってはいない。われわれは、少くとも人間が本来労して創るべき者であるということの意味を、特に人間は何を、また誰をめざして創るのかということを、また自分で創ったといいうる物は、直ちにまた自分の所有（もの）といいうるのであるかどうかを考えなくてはならない。そして働き創ることは、間違いなく人間の自己になることの条件であるのかどうか、そうだとすればまた何故、またどういう意味でなのか、をさらに問わねばならない。

しかしその前に、われわれ人間がどこまでも働きたがらぬものでもあるということを、またその理由らしいもののいくつかを、十分に確認しておく必要がある。そしてその思いに従って働かずにいようとする時、われわれは一体どういう経験をするものかという側面から、その同じ人間が働かずにいることはやはりできぬということを今少し固めておかねばならぬ。

三

労働というものは、その如何なるものも個体の生の損耗であり消費である。その限り、たしかに現実に辛労であり、

苦痛である。これは間違いない。われわれ凡夫が日常、楽をすることと働かないでいることとを等置し勝ちであることには相当の理由がある。「忙しい」、「目がまわる様だ」、「猫の手も借りたい」というのは悲鳴であり、それらは、われと我が身を励まし鞭うって、「もうアト少しの辛抱」と耐えねばならぬ様な状況をいうのである。働くことそれ自身が苦しみでないとはいいえない。仕事は決して楽ではない。働くことは辛い。

なるほど面白い様に仕事がはか取るという経験は誰にもある。われわれがいつも熱中して、無我夢中で働けるものならば、働くということはあるいは辛いというべきものではないかも知れない。働くということは、それを予料するから、それを頭で考えるから辛いものとなるのにすぎず、その中へ一旦飛びこんでしまえば、つまり働いている最中には苦痛は感じられない、ともいえるであろう。また労働には、労働をかわそうと思案し、ダラダラノロクサ動く人間によって、勝手に苦しいものにされている様な所がたしかにある。働くことを頭でアレコレ考えるというのは、一般にそれを何とか避ける方法はないか、やらずに済ます手はないかと思案するのであり、この思案は、たしかに決して愉快なものではない。何とか逃げる手はないかとわれわれが思案中の仕事というものは、果されていぬ一種の負い目の如きものとして、時と共に肥ってゆく。綺麗サッパリ片付けてしまわぬ限り、心は重く、非生産的な時間のみが徒らに流れる。借りというものは気にかかるものであり、それを果たし終った時始めてわれわれの気は楽になりうるのである。だからいつもサッサと仕事にとりかかり、テキパキと処理し、思案投げ首の余裕を心に与えねば、人はいつも潑剌として生きられる筈とも考えられる。苦しさはむしろ労働の回避にこそ伴うのであって勤労そのものに伴うのではないといった事情がたしかにあるであろう。

しかしそれならば、何故一体われわれは働かずにおくことを、仕事をかわすことを凡そ考えたりするのであろうか。もし仕事そのものが辛いのではなくて、片付いておらず、済んでおらぬ仕事だけが辛いのであるのなら、何故誰も彼もが働かずに暮らせることを、休息の得られることを、あれほどにも一致して欲するのであろうか。

われわれには苦しく辛かった労働の経験があり、その記憶が厳然としてありはしないだろうか。われわれが苦しいものとして記憶しているのは、実は過去の労働自身ではなくて、われわれが怠った、或いは避けようとした労働なのでもあろうか。しかしそれならば、何故その時避けようとしたのであろうか。

面倒なことをわれわれは先きへ先きへと繰り延ばし勝ちである。われわれは「今すぐ」仕事に取りかかることをよりは、「もう少し先きになってから」取り上げることの方を選び勝ちである。だから将来の何時かへ日づけられた労苦は、当今のものとして迫っている労苦よりも、また構想の中なる労働は現前している労働よりも、少くともわれわれの心得では、堪え易いとされているわけであろう。つまり内容の上からは同じ仕事でも、今からの時間上の距離によってその痛苦は軽減されて感じられるのである。われわれが「あの時、何故遅滞なくあの処置をとらなかったのか」と過去の自分の怠惰や不手際をかこつ場合にも、その時現実のものとしては負いえなかった重荷が、今、記憶中のものとなるや、負いえた筈のものに思えてくるのである。自分が同一である限り、同じ労苦は過去へ日付けされることによって、その重圧を減じているわけである。だから矢張り空想上のまたは記憶された労働は、他の苦痛の場合と同じく、現在のそれに比して、弱く感じられるといわねばならぬ。労働は、それが記憶中のものだから、現実には辛くもないのを辛く思うというのではなく、反対に、正に当今のものとして、われわれの思う以上に辛いものなのである。われわれは「咽喉もと過ぐれば熱さを忘れる」のである。このことの真実は、「案ずるよりは産むが易い」という今一つの真実によってすっかり駆逐されるわけではない。

私が働きたがらないのは、働くことが一先ず失うことだからである。働けば私の精力は消耗し、私なる存在から何がしかが出てゆく。実際、人間は労するばかりで食が乏しければ、疲労の極間もなく死んでしまう。往時ガレー船に漕囚となれば、就役後まず一年とは生命が続かなかったという。支那の苦力で三十歳をこえて生きえんが為には超凡の体力を恵まれていねばならなかったともきく。労働には、たしかに苦役という意味がついている。その意味では、

働くことはたしかに死にゆくことなのである。労働は一旦は饑餓と同じ方向へ、私の力の損失の方向へと向いている。自分の、また家族の飢えを満たすための食を、私は労働によって得ねばならぬが、しかも私は飢えることを恐れるのと同じ理由からまた苦役をも恐れるのである。働くことには、たださえ不足に苦しんでいるものが、まだ更に不足を加えられるという一面がある。この面から見れば、労働はたしかに饑餓を二重にすることなのである。それには私の死を加速する可能性が蔵されている。

しかも、忙しいということは確かに反面「結構な事」である。仕事が出来ぬことは悲しいことであり、われわれは仕事が無いと云って暢気に悦に入ってなどおれるものではない。すぐ前にも言った様に、われわれが仕事を逃避し繰り延べると、そこには何か借り越しに似た感じが生まれる。この負債感は、働かぬ時が長びくと、刻々にその重さを増し、その重さは遂には「いっそ思い切って働こう」と思わせる程度にまで達する。そう思った時、即坐に仕事にかかりうればよいが、さもない時には、今度は予想される仕事の辛さと、現在の心の重さの秤量が始まる。この秤りはいつまでも動揺しつづけ、定まるかと思うとまた動いて、少くとも自分からは止まってくれない。何故なら、やろうかやるまいかと思案しているその仕事は想像のうちにあるため、その規模、形状がたえず変化するばかりでなく、また疑心暗鬼の故に、秤り皿の重さや目盛の刻み自身も浮動するからである。またどうでもやらねばならぬと決めていないということは、それを負債だと覚悟していないということであり、従って負債感は秤皿上におかれるかと思えばまた下ろされ、もともと怠けたいのであるから何か時効の如きものをアテにして、その中に気が軽くなるかも知れぬなどと虫のよいことを考え、この方の秤り皿を自ら動かす工夫までしているからである。

しかもこの秤量作業はそれ自身生産的労働なのではないから、始めの労働が真実の負債ならば、その間にも利は積もってふとり続けているであろう。実際、ある仕事に突入するかわりにこれをかわし逃げる算段に一旦頭を痛め出すと、その募りゆく気の重さ、心の暗さというものは、恐らく仕事のどの様な辛さ酷さにも劣らず苦しいものにまで増

大しうる。生産に伴うどの様な辛労苦心にも劣らず、非生産的な焦慮と煩悩は耐え難いものである。

一つの仕事に着手し、ただ一つに目標が定まってさえも、その為の手段の選択は決して楽なものではない（働くことが既に辛苦である理由はここにもある）のに、ある仕事をかわそうとしている場合には、その仕事の反対対当は沢山あるため目標が仮定のものとなるだけでなく、さらに選言的に幾つにも分岐してゆくから、さしあたりの手段を選択する心労は、目標が一つに定まった場合に十倍しうるであろう。そこへもってきて幾重にも縺れた迷いが加わる。この迷いというのは、当初は「この仕事を済ましてしまおうか、それとも借りにしておく方が利口か」という単純な迷いにすぎないが、直ちにこの迷い自身をも選択肢の一つに捲きこみ、「徒らに迷っているよりは、チッとは辛くても一っそ始めた方が利口か」という新な選択、新な迷いを胎んでこずにはおかない。この迷い自身もまた――仕事の延期が実際に借りであるのなら――利息を更に積もらせつつある筈であるから、そこへ心が行くと借りを借りでない様に言い拵える慾心、空想が益々跳梁しはじめ、先きの「働いて今返えしてしまうか、借りになっても差支えないか」の選択に、返しもせず借り足しにもならぬ、つまり辛い目をせぬままで煩わしさからも解放されようという狡い工夫をさらに新な選択肢として示唆する。こうなると突発の事変でも起って跳びあがらせてくれるか、娯楽や気晴しによって、憂さを忘れることに成功――しては実は身の破滅なのだがそれにはすぐには気がつかずに――でもせぬ限り、迷いは益々複雑になり、先きの「迷っていよう（その中自然と消失してくれまいものでもないと自分を言いくるめて）か、それとも今すぐ働きにかかってとにかく煩いだけでも断とうか」という迷いは、「いや迷うがものはないのだ、私は働くのがイヤなのでもなく、働かねばならぬのでもない、働いてはならないのだ、それは正義にそむく」などという口実の案出によってさらに迷わされる。（実際、悪事を働くということが厳存し、後にもいう様に、われわれがその働きを恥じねばならぬという場合があるからそこへ援けを求めるのである。）ここで迷いはさらに増殖する。何故ならこの返しもせず借りてもおかず、という可能性には、それがもと強弁であり拵え事である以上、この強弁を思い

つかせた程にまで煩わしかった一つ前の迷いを吹き飛ばしてくれる力などはもとよりあるべき筈がない。つまり一方自分には借りなどないといい拵え得んが為の根拠らしきものの枚挙とその強度の測定にヘトヘトになりながら、他方同時に、「こんなにも面倒になるのなら、一っそ働いて返してしま――ィヤ『返す』といっては正確でない、もともと借りではないことが固まりかけてきたのだから、たとい『骨折損』にでも『貸し倒れ』にでもしてしま――おうか」といった気も動いて来るものであり、これ自身が一つの新な迷いだからである。そしてこの最後の迷いは、はじめの「働こうか借りておこうか」という迷いの下へ包摂もされうる（何故なら「自分に負い目なし」の論証はまだ済んでおらず塗り消す努力のために却って借りが目立ってもくるから）限り、ここに一つの循環がはじまる。そしてこの迷い自身もかの「負債に非ず」の立証に手間取っている間に、またぞろ借りの利子をふやしている公算が大きいであろうから、どうでも負債はなかったことに拵えることへの未練も同時に余計に強くなり（このあたりで主観的には身体的な障害も何かでて来ようゆえ、言い拵えるとはいい条、理由は――主観的には――少しはあるのである）、堂々めぐりは斉一な円運動ではなくて錯綜紛乱を極めている。ここでわれわれは自由を失う、自分で自分をどうにもできない。しかもこの迷いを推進するエネルギーも仲々尽きてはくれぬ。忘れよう、考えまいとの無理注文や、娯楽への逃避が、事態をコングラがらせる許りであることもいうまでもない。一時は気を紛らせ得ても、この種の煩悩は実に機敏に、しかも執拗に隙を狙っては立ち返ってくるからである。

支那の苦力は三〇歳で死ねばそのあと苦役はないが、われわれがはじめ労働をかわし楽をする積りで陥ったこの種の煩いと悩みとは、労働をせずにかように迷っていられる程われわれが結構な身分におかれている限り、仲々もってわれわれを死なせてくれなどするものではない。迷い死にに死ぬことのできぬわれわれは、多分幾度か自殺を思うでもあろうが、それも、「死のうか死ぬまいか」という新な迷いが先きの循環をさらに拡大しているだけにすぎまい。自殺の決心がつく位果断であるのなら、はじめからケチな迷いを迷ったりはせぬ筈であろう。（もし実際にわれわれ

がこの種の苦しみの故に自殺したとすれば、それははじめから失敗する様に計画した自殺を失敗し損こねるのである。だから煩悶しうるわれわれは、実際上死によって悩みを脱する途も奪われている。なお、いわゆる「福祉国家」というものが、労働を減らして人間が楽をすること、娯しむこと許りをめざしているものをいうのなら、それがアトム化の進行によって国家でなくなりでもせぬ限り、「苦悩国家」と呼ばるべきものにならぬ筈はない。尤も「福祉国家」とは、強制労働施設を国民の数に見合うだけ十分沢山つくり、時々饑饉や疫病や戦争を招く手配もすっかり整えた国家を言う、というのであれば話はまた別である。）

アクセクと忙しく働く事はたしかに楽なことではない。しかし辛労を避けよう、逃げようとする人間の劃策は、世が世であれば、少くとも以上述べた様な苦しみを結果する。労苦には、死へと加速する意味があったとすれば、それの回避には、死を拒みつつしかも死ぬより辛くなる、失うまいとして却って失う、という趣きがある。

われわれは一般に苦しさには大きく二種あり、その一つは辛さであり、他は悩みであると言いうるかも知れない。労苦は辛さの一種である。働くことを怠ることから生じてくる苦しみは悩みの一種であろう。そうするとすぐ上に考えた循環のうちにある迷いは、それが辛さと悩みとの間を決し兼ねている苦しさである限り、苦しさの第三の種類とも考えられる。しかし、われわれが務めを怠ること、辛さから身をよけることは、何らかの仕方でその借りを払ってしまわぬ限り、単純な気の重さだけで済んだりするものではない。済んでいない負い目は、それが負い目として身にこたえ始めるや否や、既に何ほどかの迷いを随伴している、迷いは既に始まっている。何故なら負い目とは私によって返済さるべきものであるだけでなく、また本来私によって塗り消されようとする方向をもつものであり、いずれの仕方で解消しようか、皆済することによってかそれとも塗抹することによってか、というこの迷いの存在は、負い目の意識と同時発生的といえるからである。だから悩みは始めから迷いを含んでおり、迷いはそれ自身が悩みなのである。そしてその限り、働かずに済まそうとする気の重さと新に起ってくる迷いとの全体を悩みとして辛さに対立さ

せることが許されるであろう。単純な辛さと、辛さを避けることに伴う悩みとの「あれかこれか」に成りたつ迷いは、一旦はこの両項の外にあると共に、しかも素直に辛さを引きうけぬこととしては、それも悩みを齎すのである。

自己の負い目を塗抹して無いことにしようとする試みは、人間の根性にそもそものはじめからついている。即坐に、間髪を入れずに、絶えず働くことができぬということからしてが、既に自分の負い目を認めまいとする人間の性情から出ているのであり、働きを怠ることによって、借りは或る意味で二重になるのである。個々の労働行為は返済行為の一種、いわば利を払うことであり、従ってまた負い目ありと認めることでもあると思う。働くことは、常にわれわれの務めという意味合いを何ほどかもっており、何ほどか自然本能的にはできぬ、自らを強いてせねばならぬ、という性質のものであるが、このことは一定の時に現実に働くことを怠ったのよりも前に、既に借りの状態が存在したことを示している。われわれは、どこまでさかのぼっても最初に借りのできた正確な時点を指示することができない。労働は辛いことでありながら、しかも、それはそうあって当然なこと、という趣きをもっている。そしてこのことに不服を唱えれば唱える程、却ってその当然さが増す様な所がある。

自分の生命だけを乞うて奴隷となる者は、奴隷の境涯を死よりもよしとなし、それを自ら選んだといいうる限り、つまり奴隷も無い生命を助けられたのではある限り、そこに感謝すべき理由が全くないとはいえぬであろう。今の事情はそれとは違うが、さりとて全然無関係でもない。負い目なるものがあるということ、またそれを重く感じうるということは、多分人間の享けえた特権なのである。もしも重荷を重荷と感じなくなる時があれば、それは人間が人間でなくなった時だといってよいであろう。負い目をもつということは、その負い目ある者に、曾って自らの力では充足しえなかった不足のあったことを含意している。その不足は恩恵的な貸与によって埋められえたのである。彼は貸して貰ったのである。だからこの借りを忘れるとか塗り消すとかいうことは、恩恵の否定を、つまり新な不正の発生を意味する。しかしまた負い目をもつことが、負い目を負い目として知るということでもある限り、それは失われた

正義の回復がなお可能であることをも含意している。そして負い目を自己の負い目として認めうるということは、かく認める者が正義の回復に自ら参与しうる――それが如何なる仕方でか、特にそれは如何なる意味で彼の能力によって、といいうるかは今は問わぬとして――ものであることを意味している。われわれの労働は新な負目をつくらぬこと、そして既にある負目を認めることなのである。

よってもって自己の不正を知りうる能力を良心といってよいならば、良心は決してわれわれの不正を働く傾向と離れて別に、それと二元的にあるものではない。それ自身が不正によって汚染されていない純粋な良心というようなものはむしろ形容矛盾ではないだろうか。最も良心的な者が（つまり自己の不正を鋭く深く意識している者が）最も度の高い不正をさらに重ねうるのであり、また誘惑を最も強く最も頻繁にうけうるのではないだろうか。だから良心を完全に失ってしまえば、不正を働くということもまたありえないわけであり、人間が人間である限り、良心を失いつくすということはありえない。娯楽や気晴しによって如何に良心を摩耗させようとしても、晴れやかならぬ良心は決して死にたえるものではない。

われわれの働くことには、何らかの負債の返済という意味が含まれていると思う。従って、人間が創造的であることによって人間でありうるための条件は、人間が本来重荷を負うたものであるという事情と不可分であることが気づかれる。人間にあっての働くことの必然性は、人間の責任で生じたある根源的な平衡の失調と、その回復の可能性とを同時に示している。――しかし労苦が、何かその返済という意味をもつこの負債とは、人間の一体如何なる負債なのであろうか？　人間は一体何処から、何を、何のために借りたのであろうか。人間の働くことはこの借りのどの部分の、またどういう返済なのであろうか。そして凡そ負債を為す者は、まず何らかの窮地に陥り、己れにあっての何

らか重大な不足を埋め合わせる為に借りたのであるとすれば、人間をこの負債へと強いたその窮地とは、そもそも如何なる窮地であったのか。

われわれは、一般に他の働き、他の功績を認めること少く、己れの負い目を認めることの少いものであるであろう。このことは人間の性情のうちには、己れの負い目を忘れ、踏み倒す傾向の内在することを示している。所が借りを忘れ、踏み倒し勝ちの者、その前科のある者とは、彼が負債をなすに当って抵当を要求されて当然な者にほかならぬ。人間は、彼の労働がその何らかの返済の意味をもつ借りを許された時、何か抵当を要求されはしなかっただろうか。そして大なり小なり己れの負債を踏み倒す度毎に、抵当としたそのものを現実に没収されてきたのではなかったろうか。いや人間は当然もはや己れの所有ではなくなったそのものをば、なおも頑なに、不法に占拠して差し出すことを拒んで来たが、その不法が何時までもは続きえぬことに今や気づかざるをえなくされているのではなかろうか。が人間が何かその様な何かを抵当においたのだとして、それは人間の何であるのか？　それは再び天下晴れて人間の手にかえりうるものだろうか？　――ああそれにしても、人間の世界には何の故に苦悩があるのか？　また何が真にその名をもって呼ばるべき苦悩であるのか？真の安楽と休息とは何処にあるのか。またどの様にして恵まれうるのか。

（未完）

（筆者　大阪市立大学文学部〔哲学〕助教授）